

三条地震(1828)を描いた画帖「懲震毖鑑」

新潟県立西新発田高等学校 河内一男*

1828 年(文政十一年)に越後三条で起きた地震は典型的な内陸直下の地震だった。この地震では、信濃川に沿って、つまり越後平野の延長方向の北北東-南南西 40km、西北西-東南東 20kmの楕円形の範囲の村々がほぼ全滅した。理科年表によれば全壊 9808、焼失 1204、死者 1443 の大被害を受けている。

この地震のとき、越後新発田藩領今町(現新潟県見附市)の村役人であった小泉其明とその息子の蒼軒が、震災時の救出活動や被害調査で大活躍をする。今日に残る三条地震の被害状況や奇事・変事などに関する文書のほとんどはこの親子がとりまとめたものである。小泉其明・蒼軒親子は二代に渡って越後・佐渡の地図作製に尽力した地理学者で、その名は江戸にも知られていたという。地震当時、其明 68 歳、蒼軒 32 歳であった。

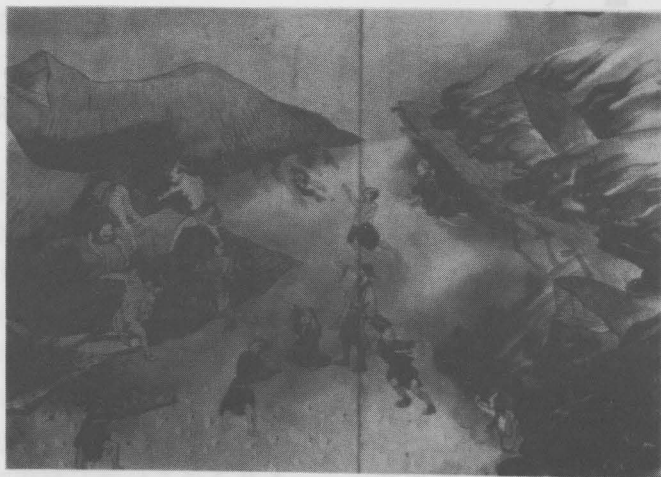
其明は外出先で地震に遭遇した。そして帰路で各地の惨状を見聞したり、後に他村のようすを聞いたりして画帖「懲震毖鑑」を残すことになった。其明の地図作成に携わる以前の本業が画工だったこともあり、一枚一枚の絵は精緻を極めて写實的に描かれている。構成は、序文、越後・佐渡全図に被害域を示した図、七言絶句、そして29枚の彩色画が連なり、板表紙折本型(見開いた一枚は31cm×45cm)で製本されている。

なお、画帖の巻末には大森房吉の閲覧所見(原文は縦書き半野紙二枚)が貼付されている。興味深い内容なのでその全文を紹介する。

文政十一年ニ越後三条地震アリ、次ギテ北方ニ移リテ天保四年ノ庄内佐渡ノ地震トナリ、終ニ南方ニ及ビテ弘化四年ノ善光寺大地震トナレリ、何レモ極メテ激烈ナル破壊の地震ナルガ相関連セル現象ニシテ明ニ信濃川流域地震地帯ノ存在ヲ示スモノトス、抑々大地震ハ地震地帯ニ沿ヒ発生スルモ、同一地点ヨリ繰リ返シテ起コルコト無ケレバ、前時ノ大地震ヲ調査スルハ同一地震地帯ニ属スル大震将来ノ発生予測ニ関シ実ニ欠ク可カラザル所ナリトス、然ルニ三条地震ノ記録類ハ甚タ稀少ニシテ調査材料ヲ得難キヲ憾トセシガ、今回幸ニ入沢医学博士ノ好意ニヨリ、久保宗吉君ヲ介シテ本間正雄君ガ所蔵セラル、同君祖先小泉其明翁自筆ノ懲震毖鑑ヲ借覽スルヲ得タリ、此画帖ハ文政震災ノ実地ヲ明細ニ描写セルモノニシテ三条地震ノ調査上極メテ有益ナル研究資料ナルヲ認メタルヲ以テ全部ヲ写真ニ複写シ、永ク東京帝国大学地震学教室ニ保存スルコトナシタリ、爰ニ本間氏并ニ入沢博士久保氏ニ対シ深厚ナル謝意ヲ表ス 大正九年七月十四日 布哇へ出発スル前一日東京帝国大学地震学教室ニテ 理学博士 大森房吉

(この画帖に関しては、地震学会広報紙『ないふる』第28号の表紙と本文の6頁でも紹介した。同学会のホームページではカラーで掲載の絵図を見ることができる)

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/naifuru/naifuru.html>



中央に救助の指揮をとる陣笠姿(息子の蒼軒?)、斧をもって駆けつけた者、棒で柱を起こそうとしている者、子供を救出して出てきた者などが活動的に描かれている。

* 〒957-8522 新潟県新発田市西園町 3-1-2 西新発田高等学校